幸せな学校に　ふかえ　校長室だより　11

大阪市立深江小学校長　西岡　貴史

November　2026

「評価」は何のためにするか

学校教育では、さまざまな場面で子どもたちを「評価」しています。最も身近な例は通知表ではないでしょうか。しかし、「なぜ評価をするのか」については、あまり意識されていないように思います。

現在の評価は、子どもたちの学力や能力を単純に「よい」「わるい」と判定するためのものではありません。大切なのは、子どもたちの今の状態を客観的に把握し、その状況を伝えることで、次の目標に向かってがんばろうと思える意欲につなげることです。

例えば算数であれば、「計算ができる」「論理的に説明できる」「学習を振り返って次のめあてを立てられる」といった観点があります。「計算はできるようになったから、次は論理的に説明する力を伸ばそう」と考えられるようになることが大切です。評価は、できた・できないを判定するためだけのものではないのです。

では、図画工作ではどうでしょうか。絵などの作品の評価は難しいです。作品の上手・下手だけで決まるものではありません。形のとらえ方や色使いなど、技能面を評価することもあります。それももちろん大切なことです。しかし、絵を描いたり工作を作ったりすることに苦手意識をもっていても、自分の表現したいことを楽しみながら作品に表している子どももいます。話を聞くと、作品の中にストーリーや思いが込められており、その子ならではの世界観が表現されていることも少なくありません。

私は、「評価」とは、立場の上の人が下の人のできを決めつけるものではないと考えています。自分一人では気付きにくい成長や課題をともに見つめ、できたことを喜び、課題が残ったことについては次の挑戦への意欲につなげていく。そのような前向きな営みでありたいと思っています。

昭和２７年の卒業生の方々が来校されました

先日の日曜日、本校を昭和27年に卒業された４名の方と、そのお孫さんが学校を訪ねて来てくださいました。お話をうかがうと、節目ごとに同級生が集まり、同窓会を続けておられるとのことでした。今回は20数年ぶりの再会だったそうで、「懐かしい深江小学校をもう一度見てみたい」という思いで来校されたそうです。

もちろん、校舎をはじめ学校の様子は当時とは大きく変わっています。それでも、「あの辺りには○○があったなあ」と懐かしそうに思い出を語られる姿がとても印象的でした。お話を聞いているうちに、私自身もまるで当時にタイムスリップしたような気持ちになりました。

また、当時は４代目校長の松原柳吉校長先生の時代で、深江小学校には1,000人を超える児童が在籍する大規模校だったそうです。１学級の人数は60人以上で、1年生は午前と午後の2部制で授業を行っていたというお話には驚かされました。その頃、ちょうど宝栄小学校が開校したことも教えていただきました。

私たちは現在の深江小学校しか知りませんが、こうしたお話を通して、87年にわたる学校の歴史の重みや、卒業生のみなさん一人ひとりの歩んでこられた人生に思いをはせることができました。 [

これからも子どもたちが深江小学校で楽しい思い出をたくさんつくり、大人になってからも「深江小学校で過ごせてよかった」と思い出して元気になれるような学校であり続けたいと思います。

学校ホームページ